

生涯学習としてのテニス非継続に関わる要因

宮本邦雄¹・磯辺和正²

(1: 東海学院大学人間関係学部心理学科, 2: 健康福祉学部管理栄養学科)

要 約

本研究では、生涯学習としてのテニスの非継続に関わる要因について性差と年代差（若年層、中年層、高齢者層）を検討した。継続群と非継続群の比較から、親の影響でテニスを早期から開始し、サークルやスクールに参加して、テニスへの参加度が高かったと考えられる者のほうがテニス参加から離脱する傾向があることが示唆された。テニス非継続各因子の性差から、女性は、経済的な問題や子どもの存在など家庭環境の原因によりテニスの継続が困難になること、またテニスが上達しないことによりやる気が低下してテニス参加を中止する傾向が強いことが示された。年代間比較からは、高齢者群は身体的問題が非継続の理由となることが認められた。

キーワード：テニス、スポーツ参加、生涯学習

(2016.9.23 受稿 査読審査を経て 2016.10.7 受理)

問題と目的

高齢化社会の進行に伴い、生涯学習はますます重要な役割を果たしているが、中でも健康・スポーツの実践は健康の促進とともに生きがいづくりの役割も果たしている。

岡本(2004)は、青年後期から高齢期までの各ライフステージに応じた生涯学習支援を目的として、関心を持つ課題、学習したい課題、助言や援助を要する課題を調査し、生活の質とウェルビーイングとの関連を検討した。男女とも、関心のある課題には体力・健康づくりが最も選択率が高く、学習したい課題、助言や援助を要する課題でも上位に位置していた。そして、生涯学習によって生活の質(Quality of Life; 以下 QOL)や心理的充足感、人生の意味の意識が向上することが示唆された。

また、平成 24 年度の世論調査によると、この 1 年間の生涯学習体験は、健康・スポーツ(健康法、医学、栄養、ジョギング、水泳など)が 30.4%、趣味的なもの(音楽、美術、華道、舞踊、書道、レクリエーション活動など)が 25.7%と高い比率を示した(内閣府, 2012)。

生涯学習の一環としてのスポーツ参加は中高年者の余暇活動と健康促進に大きな役割を果たしている。例えば、運動・スポーツ活動の継続は、高齢者の生活満足度や QOL を向上させる要因となっている。

石澤(2004)は、東広島市の調査において、定期的な運動・スポーツを行なっている高齢者は、日常生活にお

いても活動的で、生活満足度も高いことを示した。さらに太田・仲野・丸山(2005)は、仙台市のスポーツ振興を目的とした「元気はつらつチャレンジカード」の利用度が高いほど健康状態も高く維持され、余暇活動も活発であることを報告している。また、Elavsky, McAuley, Motl, Konopack, Marquez, Hu, Jerome, & Diener(2005)は、運動習慣のない高齢者を対象として運動介入を行い、運動に関するセルフ・エフィカシーを通して対象者の QOL が向上することを示した。

宮本・磯辺(2015)は、生涯学習としてのテニスの継続に関わる要因が成人前期から高齢期にかけてどのように変化するかを横断的調査によって検討した。その結果、若年層ではテニス参加から離脱するケースが多いが、高齢者では安定的に参加していることが示された。また若年層は、大学での活動の延長線上でテニスを実践していること、高齢者層は競技性の低い余暇活動として楽しんでいることが示唆された。継続要因の分析から、各世代共通して、友人と共にテニスをするのがテニスへの参加を活性化するが、若年層では異性友人の要因が逆にテニス継続を阻害すること、中年層では競技性の低い余暇活動的なテニス参加がむしろ阻害的要因になることが示唆された。

宮本・磯辺(2015)はテニス継続の要因について検討しているが、テニス参加から離脱する非継続要因については言及していない。スポーツからの離脱については性差

の関与が予想される。従来、女性の年代別の就業状況によると 30 代の比率が低いこと (M 字型曲線) が認められており、結婚や出産により就業率が低下する。こうした女性にみられる就業の阻害的要因の影響が生涯学習の側面においても現れるのではないかと考えられる。

本研究では、生涯学習としてのテニスの非継続要因について継続者と非継続者の比較を通して検討する。家族構成や職業、テニスを始めたきっかけ、サークル経験、テニススクール経験についての質問紙調査を通して、テニス非継続の要因について年代間の比較と性差を検討することを目的とする。

方法

調査対象：東海地方の成人、男性 137 名(平均年齢 54.3 歳, $SD=13.39$), 女性 177 名(平均年齢 49.5 歳, $SD=10.80$) の計 314 名の協力を得た。協力者のうちテニスを継続している者 250 名、中止した者 64 名であった。

倫理的配慮：質問紙の表紙に、調査の趣旨、調査への協力は自由意志に基づくこと、結果は統計的に処理され個人情報には厳重に保護されることを明記し、質問紙への回答をもって同意とみなした。

調査手続き：2015 年 5 月から 2016 年 5 月に、岐阜県において行なわれたテニスイベントへの参加者、および公営施設でテニスに参加している成人、および A 高校と B 大学のテニス部 OB を対象に調査を行なった。調査の趣旨を説明した後、質問紙を手渡しその場で回答してもらい回収した。B 大学テニス部 OB には質問紙の郵送による調査を行なった。

調査内容：質問紙は以下の内容を含んでいた。

- ①基本的属性：性別、年齢、家族構成、職業
- ②テニス経験：テニス経験年数、開始年齢、中止年齢、開始理由、サークル経験、スクール経験
- ③テニス継続理由：テニスの開始・継続に関わる質問、「娯楽性」、「仲間関係」、「健康促進」、「環境要因」の 25 項目からなる質問紙を作成した。「あてはまらない」1 点から「あてはまる」5 点の 5 件法で回答を求めた。
- ④テニスの継続状況：「友人とプレイしている」「スクールに入っている」など 6 項目に「はい」「いいえ」の 2 件法、テニス活動の頻度に 4 件法、試合への参加に 3 件法で回答を求めた。
- ⑤テニス中止理由：テニスを中止した理由について、「心理的要因」、「身体的要因」、「人間関係要因」、「時間・経済的要因」、「環境要因」の 27 項目について 5 件法で回

答を求めた。

結果

1. 継続者・非継続者の基本特性

テニス継続者は 250 名 (男性 112 名, 女性 138 名), 非継続者 64 名 (男性 25 名, 女性 39 名) であった。家族構成, 職業, テニスの開始年齢と経験年数, サークル体験, スクール体験について継続者と非継続者の比較を行なった。なお, 年代別比較を行うために, 調査対象を 40 歳未満群, 40 歳以上 60 歳未満群, 60 歳以上群に分けた。継続群と非継続群の各年代別人数を表 1 に示す。なお, 欠損データが存在するため度数が一致しない場合がある。

表 1 テニス継続者と非継続者の年代別人数

	40歳 未満	40～59 歳	60歳 以上	合計
テニス継続	31	141	76	248
テニス非継続	16	40	8	64
合計	47	181	84	312

1) 家族構成 (同居)

子どもについては、継続者で子ども有 135 名、無 115 名、非継続者で有 46 名、無 18 名であり、有意に非継続群の子ども有が多かった ($\chi^2(1)=5.956, p<.01$)。子どもの人数は、継続者平均人数 0.9 名, $SD=.98$, 非継続者平均人数 1.49 名, $SD=1.09$ であり、有意に非継続者が多かった ($t(1)=3.835, p<.001$)。同居している実父・義父については、継続者で父親有 25 名、無 225 名、非継続者で有 12 名、無 52 名であり、非継続群が多い傾向がみられた ($\chi^2(1)=3.753, p<.05$)。母親については、有意な関連はみられなかった。

2) 職業

職業は、継続者で、フルタイム 108 名、パートタイム 65 名、無職 76 名、非継続者で、フルタイム 33 名、パートタイム 16 名、無職 15 名であり、有意な偏りはみられなかった。

3) テニス開始年齢と経験年数

テニスの開始年齢は、継続者の平均年齢は 25.7 歳, $SD=12.85$, 非継続者の平均年齢は 15.5 歳, $SD=7.97$ であり、有意に非継続者が早かった ($t(158)=7.926, p<.001$)。低年齢でテニスを開始した方がテニス参与を中止する傾向が高い。テニスの経験年数は、継続者は平均年齢 21.7

年, $SD=11.05$, 非継続者は平均 10.8 年, $SD=8.44$ であり, 有意に非継続者が短かった ($t(125)=8.602, p<.001$).

4) テニスを始めたきっかけ

テニスを始めたきっかけは, 継続群は, 友人の影響 103 名, 親の影響 28 名, 部活 15 名, マンガ・アニメ 13 名, プロ選手 11 名, 兄姉 11 名, その他 61 名, 非継続群は, 友人の影響 16 名, 親の影響 15 名, 部活 7 名, マンガ・アニメ 5 名, プロ選手 4 名, 兄姉 1 名, その他 13 名であり, 非継続群で親の影響が有意に多く, 継続群で友人の影響が大きいことが認められた ($\chi^2(6)=15.037, p<.05$).

5) サークル経験

テニスサークルへの参加経験については年代別に分析したところ, まず中学時代に群間に有意な偏りがみられ, 継続群で参加経験有 46 名, 無 199 名, 非継続群で参加経験有 27 名, 無 37 名であった ($\chi^2(1)=15.415, p<.01$). 同様に高校時代においても, 継続群で有 101 名, 無 144 名, 非継続群で有 52 名, 無 12 名であった ($\chi^2(1)=32.521, p<.01$). また大学時代でも, 継続群で有 55 名, 無 190 名, 非継続群で有 34 名, 無 30 名であった ($\chi^2(1)=23.286, p<.01$). 非継続群では中・高・大学時代でのサークル経験者が多いことが認められた。一方社会人では, 継続群で有 37 名, 無 208 名, 非継続群で有 3 名, 無 61 名であり ($\chi^2(1)=4.884, p<.10$), 継続群のサークル経験者が多い傾向がみられた。

6) テニススクール経験

テニススクールへの参加経験は, 高校時代において継続群で参加経験有 26 名, 無 215 名, 非継続群で有 12 名, 無 51 名であり ($\chi^2(1)=3.115, p<.10$), 非継続群でスクール経験者が多い傾向がみられた。また大学時代でも, 継続群で有 3 名, 無 237 名, 非継続群で有 4 名, 無 59 名であり ($\chi^2(1)=5.749, p<.05$), 非継続群でスクール参加者が多かった。逆に社会人では, 継続群で有 115 名, 無 126 名, 非継続群で有 14 名, 無 49 名であり ($\chi^2(1)=13.290, p<.001$), 継続群のサークル経験者が多かった。

2. テニス非継続理由の因子分析

テニス非継続理由に関わる質問 27 項目について, 主因子法・プロマックス回転により因子分析を行なった。スクリープロットの減衰状況や解釈可能性を検討し, さらにいずれの因子にも負荷量の低かった 6 項目を削除し分析を繰り返した結果, 表 2 に示すように, 6 因子解を採用した (因子負荷量.35 以上, 累積寄与率 60.6%)。第

1 因子は, 「経済的余裕がない」, 「子育てで余裕がない」などからなり「経済・家庭」因子とした。第 2 因子は, 「上達しないから」, 「いつも負けるから」などであり「スキル停滞」因子とした。第 3 因子は, 「他の趣味をやりたいたいから」, 「他にやりたいことがあるから」であり「関心変更」因子とした。

第 4 因子は, 「興味がなくなったから」, 「楽しくなくなったから」などからなり「やる気喪失」因子とした。第 5 因子は, 「手足の故障のため」, 「病気になったから」などであり「身体問題」因子とした。第 6 因子は, 「相手がいないから」, 「テニスコートが近くにないから」などであり「機会喪失」因子とした。

各因子項目の合計得点を算出して因子得点とした。各因子の信頼性係数 α は表 2 に示すように, 第 4 因子を除き .7~.9 であり, 研究の目的を考慮して全ての因子を分析に用いた。

3. テニス非継続理由の性差と年代差

1) テニス非継続理由各因子の性差

テニス非継続各因子の性差と年代差の要因については, 両要因の 2 要因分散分析を行うべきだが, 人数に偏りがみられるため個別に分析を行った (表 3)。まず, 経済・家庭因子が有意であり ($t(54)=5.688, p<.001$), 女性の方が高い得点を示した。また, スキル停滞因子 ($t(52)=4.827, p<.001$) とやる気喪失因子 ($t(59)=2.331, p<.05$) においても同様に女性の方が高い得点を示した。

2) テニス非継続理由各因子の年代別比較

さらに各因子得点の年代別比較のため分散分析を行なったところ (表 4), 身体問題因子に有意な群間差が認められ ($F(2,52)=3.643, p<.05$), LSD 法による多重比較の結果, 60 歳以上群の得点が 40 歳未満群, 40-59 歳群よりも高いことが認められた。

考察

本研究の目的は, 生涯学習としてのテニスの非継続要因について継続者と非継続者の比較を通して検討することであった。また, 年代間の相違と性差についても考察することを目的としていた。

まず, 家族構成についてのテニス継続群と非継続群の比較から, 子どもがいることや父親と同居していることがテニス継続の阻害要因になっていることが示唆された。また, テニスを始めたきっかけについては, 継続群で友

生涯学習としてのテニス非継続に関わる要因

人の影響が大きく、非継続群で親の影響が有意に大きいことが認められた。さらに、サークル経験の比較から、中学から大学までサークル活動を経験していた者の方がテニス参与を中止する傾向があり、社会人のサークル体

験者は逆にテニスを継続する傾向がみられた。テニススクール経験については、サークル経験と同様、高校と大学でテニススクールを経験した者の方がテニス参与を中止する傾向がみられ、社会人では逆にスクール経験者の

表2 テニス非継続理由質問項目の因子分析

番号	質問項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
第1因子 経済・家庭因子 ($\alpha=.836$)							
13	経済的余裕がないから	0.847	0.259	-0.073	-0.008	0.01	-0.175
20	子育てで余裕がないから	0.757	-0.248	-0.053	0.13	-0.033	0.26
15	ラケットやボール代が高いから	0.709	0.14	-0.184	-0.025	0.18	0.037
27	家事が忙しいから	0.677	-0.096	0.124	-0.1	-0.032	0.223
18	家族が反対するから	0.407	0.383	-0.141	-0.127	-0.109	-0.031
第2因子 スキル停滞因子 ($\alpha=.779$)							
16	上達しないから	0.063	0.783	0.113	0.003	-0.07	-0.088
22	いつも負けるから	0.008	0.782	-0.032	0.024	0.134	0.049
7	負けるのがいやだから	-0.192	0.693	-0.127	0.043	0.011	0.258
24	日焼けするから	0.261	0.52	0.101	0.059	-0.056	-0.024
第3因子 関心変更因子 ($\alpha=.850$)							
21	他の趣味をやりたいから	-0.143	-0.028	1.014	-0.064	0.099	0.073
19	他にやりたいことがあるから	-0.043	0.051	0.789	0.074	-0.029	-0.05
第4因子 やる気喪失因子 ($\alpha=.704$)							
4	興味がなくなったから	0.075	-0.15	0.102	0.958	0.012	0.023
1	楽しくなくなったから	-0.18	0.186	-0.243	0.71	-0.001	0.062
11	やる気が出ないから	0.053	0.226	0.225	0.569	-0.136	-0.06
第5因子 身体問題因子 ($\alpha=.641$)							
8	手足の故障のため	0.144	-0.132	0.119	-0.016	0.884	-0.078
5	病気になったから	-0.253	0.066	-0.125	-0.035	0.667	0.097
26	身体に悪いから	0.068	0.151	0.04	-0.029	0.59	-0.035
12	足腰や腕が痛くなるから	0.145	0.349	0.125	0.088	0.364	0.033
第6因子 機会喪失因子 ($\alpha=.715$)							
3	相手がいないから	0.21	-0.081	-0.106	0.121	0.015	0.649
6	テニスコートが近くにないから	0.013	0.264	0.15	-0.01	0.02	0.56
9	テニスをやる機会がないから	0.116	0.212	0.148	-0.208	-0.183	0.363
		因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
	因子1		0.486	0.273	0.007	0.012	0.146
	因子2			0.265	0.268	0.179	0.194
	因子3				0.155	-0.104	0.118
	因子4					-0.077	0.168
	因子5						-0.12

表3 テニス非継続理由各因子の性差 (*SD*)

n	男性		女性		t 値	性差
	18-23	(SD)	37-38	(SD)		
経済家族	6.33	(2.301)	11.79	(4.878)	5.688	男性<女性
スキル停滞	5.00	(1.847)	8.51	(3.548)	4.827	男性<女性
他領域関心	4.72	(2.718)	5.47	(2.826)	ns	
やる気低下	5.52	(2.502)	7.34	(3.232)	2.311	男性<女性
身体問題	8.67	(4.537)	6.59	(2.843)	ns	
機会喪失	7.64	(3.303)	8.87	(3.496)	ns	

表4 テニス非継続理由各因子の年代間比較 (*SD*)

n	40歳以下		40-59歳		60歳以上		F 値	群間比較
	12-13	(SD)	37-41	(SD)	6-7	(SD)		
経済家族	10.50	(3.802)	10.50	(5.285)	6.17	(2.858)	ns	
スキル停滞	6.33	(3.200)	8.03	(3.594)	5.33	(2.422)	ns	
他領域関心	4.42	(1.975)	5.63	(2.990)	4.33	(2.658)	ns	
やる気低下	6.08	(3.252)	7.17	(2.991)	4.71	(2.752)	ns	
身体問題	6.17	(3.433)	7.08	(3.295)	10.67	(4.179)	3.643	39. 40-59<60
機会喪失	8.08	(3.451)	8.78	(3.206)	7.00	(4.796)	ns	

方がテニスを継続するという結果となった。

得られた結果まとめると、まず親の影響でテニスを早期から開始し、サークルやスクールに参加して、かなりテニスへの参加度が高かったと考えられる者のほうがテニス参加から離脱する傾向があることが示唆された。

スポーツ競技者のスポーツからの離脱行動については、バーンアウトが一つの要因と考えられ(野邊・梶房, 2013)、本研究のテニス非継続者にもこうした事例が含まれている可能性がある。中込・岸(1991)は、バーンアウト選手のスポーツへの取り組みの変容に関する事例研究から、①競技での成功、②競技への熱中、③競技成績の停滞、④競技への固執、⑤バーンアウト、という変容過程を抽出した。スポーツ選手のバーンアウトは、単に競技成績の低下やスポーツからの離脱だけでなく、対人関係や就学・就業上の問題、精神衛生の悪化といった領域にまで及ぶことが指摘されている(岸・中込, 1989)。しかし、本研究における調査対象者については、バーンアウト傾向と競技における成績実績について尋ねていないのでさらに言及することは避けたい。

テニス非継続理由各因子の性差を検討してみると、経

済・家庭因子、スキル停滞因子、やる気喪失因子において女性のほうが高い得点を示した。すなわち女性は、経済的な問題や子どもの存在など家庭環境の原因によりテニスの継続が困難になること、またテニスが上達しないことによりやる気が低下してテニス参加を中止する傾向が強いといえる。

経済的理由や子育てによって、特に女性のテニス参加が阻害されることが示された。これは、女性の就業曲線が結婚・出産後に低下するM字型曲線を示すことと関連すると思われる。総務省統計局(2016)によると、男女共同参画社会の浸透に伴い労働力人口比率のM字型曲線の谷は浅くなっているが、東海地方は全国で最も低く66.3%である。結婚や子育て、あるいは家庭の事情により、スポーツ参加が阻害されている可能性があり、女性が子育てや家事を主に担当するという伝統的性役割観が働いていると考えられる。

また女性ではテニスの上達しないことがモチベーションを低下させ、テニスを中止するきっかけになっていることが示唆された。スポーツ参加に関わらず、文化的活動やボランティア活動など生涯学習へのやる気の低下や

興味・関心の変化は、就業・結婚・出産・退職などの環境移行や人間関係の変化と連動すると思われるが、特に女性において強く影響しているのではないだろうか。

テニス非継続各因子について年代間で比較したところ、身体的問題において、60歳以上群の得点が40歳未満群、40-59歳群よりも高いことが認められた。テニスは他のスポーツと異なり高齢者でもレベルに応じた楽しみ方ができると思われるが、加齢に伴う身体的な問題によって離脱するものも多いと考えられる。

最後に本研究の限界と課題について言及したい。第一に、本研究に調査対象は、著者らが関係するテニス組織や人間関係を利用してサンプリングしたものであった。それ故、テニス参加を中止した者に調査協力を求めることが困難であったことから、サンプリングが偏った可能性は否めない。

第二に、本研究ではテニスを実際に行う参加型の参加形態を取り上げたが、野球やサッカーなどのように高齢者では観戦型の参加の方が一般的であろう(野邊・梶房, 2013)。加齢に伴う身体能力の低下によって参加型から観戦型に移行していくとも考えられる。宮本・磯辺(2015)は、中年期ではテニス継続因子のうち競技性の低い余暇活動として楽しむ傾向が抑制的影響を及ぼすことを見出し、テニス参加は加齢にともない競技型から余暇活動型へと移行することを示した。さらに、自身がテニスのプレイを楽しむこととともに教える楽しみも加わってくることも考えられる。

第三に、本研究においては生涯スポーツとしてのテニスを取り上げた。野球やバレーボールなど他の集団スポーツ(林・湊, 1994)や個人でも可能なスポーツ(ランニングや登山など)でも本研究の結果が適用されるのか検討する必要があるだろう。さらに、スポーツ以外の生涯学習への参加が発達段階にともないどのように変化するか検討することも必要であろう。

謝辞

本研究の実施にあたり、調査に協力して頂きましたテニス愛好者及び元愛好者の皆様に感謝いたします。

注

1. 本研究は日本教育心理学会第58回総会(2016年10月香川大学)において発表された。

引用文献

- Elavsky, S., McAuley, E., Motl, R. W., Konopack, J. F., Marquez, D. X., Hu, L., Jerome, G. J., & Diener, E., (2005) Physical activity enhances long-term quality of life in older adults: Efficacy, esteem, and affective influences. *Annals of Behavioral Medicine*, 30, 138-145.
- 林 喜美子・湊 久美子, (1994) 家庭婦人が生涯スポーツ活動に長年に渡って参加できる要因 和洋女子大学紀要家政編, 34, 61-78.
- 石澤伸弘, (2004) 後期高齢者の生活満足度に影響を及ぼす運動・スポーツ活動と日常生活動作(ADL)のケーススタディ 体育学研究, 49, 305-319.
- 岸 順二・中込四郎, (1989) 運動選手のバーンアウト症候群に関する概念規定への試み 体育学研究, 34, 235-243.
- 内閣府, (2012) 生涯学習に関する世論調査 <http://survey.gov-online.go.jp/h24/h24-gakushu/index.html>
- 中込四郎・岸 順二, (1991) 運動選手のバーンアウト発生機序に関する事例研究 体育学研究, 35, 313-323.
- 野邊政雄・梶房 出, (2013) スポーツへの関わりに関する研究動向 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 153, 109-113.
- 宮本邦雄・磯辺和正, (2015) 生涯学習としてのテニス参加の年代間比較 東海学院大学紀要, 9, 119-128.
- 岡本祐子, (2004) 生活の質と精神的充足感から見た生涯学習ニーズ—成人期の「アイデンティティ探求」ニーズの分析— 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 53, 175-183.
- 大田貞夫・仲野隆士・丸山富雄, (2005) 高齢者のQOLに及ぼす継続的なスポーツ実践の影響に関する研究—仙台市の高齢者の事例— 仙台大学大学院スポーツ科学研究科論文集, 6, 17-24.
- 総務省統計局, (2016) 労働力調査ミニトピックス No.17, 1-5.

Factors Influencing the Discontinuance of Tennis as Lifelong Learning

MIYAMOTO, Kunio and ISOBE, Kazumasa

Abstract

This study examined the factors influencing the discontinuance of tennis as lifelong learning focused on sex and age differences. Comparison between the continued group and the discontinued group suggested that people who started playing tennis from childhood with parental involvement and attended tennis circles or tennis schools and who showed high commitment are more likely to stop it. Sex difference as a factor of tennis discontinuance suggested that women tend to have difficulties in continuing commitment to tennis owing to domestic financial problems and child rearing. Women also showed tendency to quit tennis because of poor skill improvement and lowered motivation. Comparison between different age groups showed that physical problems were one of the reasons to give up playing tennis among elderly people.

Keywords : tennis, lifelong learning, commitment to sport